

<論文> 「くれなゐ」における明子の言説

著者	長谷川 啓
雑誌名	日本文学誌要
巻	36
ページ	139-149
発行年	1987-03-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019501

「くれなる」における明子の言説

長谷川 啓

1

中野重治の書簡集『愛しき者へ』⁽¹⁾に、夫の重治が出獄後、原泉が妻としての立場と女優としての仕事の矛盾に苦しみ、別居の話さえ持ち出すくだりがある。手紙から伝わってくる原泉の苛立ちは、同じ頃佐多稲子が「くれなる」を書かなければならなかった必然性を納得させてくれるが、おそらくこうした事態は、プロレタリア運動に参加していたカップルで、職業を持つ妻たちが、夫の出獄後に経験した共通の悩みであったろうと推測される。それは一九三四年以降の運動敗走期ともかさなっており、いっそう深刻な様相を呈したのではなからうか。「くれなる」のなかで佐多稲子は、分身である明子に、二年間の留守中に、私はほんたうに、ひとりで暮らす自由さを味はった。／それは何という悲しいことだつたらう。夫を愛してゐながら、独り暮らしの自由さを希ませる矛盾は、女の生活の何処にひそんでゐるのであらうと云わせているのである。また同じく明子に、宮本百合子とおぼしき岸子に対して、へあなたは、この間随筆で、夫婦とも作家である場合のことを書いてプロレタリア作家の場

合にはその困難さは解決がある、と言つてゐたけれど、具体的な問題ではあれで済まないものがあるわねと云わせ、革命運動を担う男女にしてなお、性差を抱えもってしまう結合関係の実体を指摘しているが、こうした問題は、プロレタリア運動が、「青鞥」の女性解放運動をブルジョア的ものと否定してかかり、社会主義がくれば男女同権が実現すると規定して、まず何よりも社会変革を優先させたあり方そのものにもかかわつていよう。ハウスキーパーのような性差別の噴出も、ある意味で象徴的ともいえる当然の結果ではなかつたらうか。

ところで今あげたように、「くれなる」における明子の言説の中核は、なんといつてもへ夫を愛してゐながら、独り暮らしの自由さを希ませる矛盾、すなわち妻としての立場と作家としての仕事の矛盾という、悲鳴にも似た結婚生活の内部告発にあるだろう。したがってフェミニズムの文脈でみる時、「くれなる」は清水紫琴「これ指環」⁽²⁾、田村俊子「彼女の生活」⁽³⁾、伊藤野枝「惑ひ」⁽⁴⁾、宮本百合子「伸子」⁽⁵⁾等々について、日本の近代の女性作家が、結婚制度のしくみを開示し、自己解放や自己実現にむかつて苦闘する女たちを描出

した系列に位置しており、「伸子」のもう一つ先の問題を提出しているといえよう。つまり、「伸子」は生き方の違うカップルの問題だが、「くれなる」はレボリューションを志向する同志愛的な対関係の場合の問題であり、これとてもなお結局は性役割の支配から脱け出していない男女の関係構造を、照らし出している。この場合は夫以上に家の経済を担っている（しかも生活全体が仕事のような、常に神経の張りつめた作家稼業である）にもかかわらず、母として主婦としての煩雑な家事も抱え込まざるをえない、それ故にいつそう性差が歴然とする場合の妻の立場を描き出し、現在の共稼ぎ夫婦の状況にもつながる「妻の席」の仕かけを切り開いてみせているのである。もっとも宮本百合子が『婦人と文学』で、へ女一人が、女として自分のうちにかくされている可能性を見出し、培い、育ててゆくとする過程に、その社会の歴史のおいめと習俗のきずなが、のびたい女自身の足をからめるばかりか、根本にはそれを助けようとする精神で一緒に暮している筈の男の脚をも引からめて、そこに悲しい相剋紛糾を生む。そういう女の苦しみの文学」と、その本質に鋭く迫りながら、さらに「男性への抗議の書」（青野季吉）⁽⁶⁾などではなくて、むしろ「自然発生の要素を多分にもつ女性の苦悩の書にとどまっているところこそ、却ってこの作品の文学としての弱点が在る」と、指摘しているけれども。がしかし、確かに解決策が示されていず混沌は深まるばかりだが、夫か仕事か二者択一を迫られてもがく女の叫びそのままのような、作者自身の肉声がほとばしり出ている作品だけに、問題の所在を痛烈に、なまなましい形でつたえているといえるだろう。

佐多稲子にとって「くれなる」は、日中戦争開始前後の、女性解放に目覚め、自己実現への意欲にもっとも燃えていた時期の記念碑的な作品で、一九三五年の元旦から夏の終りにかけての、そうした欲求が窪川鶴次郎との夫婦生活に危機（夫の女性問題）を生じさせていくいきさつを扱っている。一九三六年の一月から五月まで『婦人公論』に連載され、最終回（一九章以降）のみ「晩夏」と題して三八年の八月に『中央公論』に発表された。二年近く後に書かれた「晩夏」では、夫の二度目の女性問題、鶴次郎と田村俊子の情事の影響をいささか引きずっているし、作品全体をおおう時代背景にしても、プロレタリア運動敗走期のかげりを帯び、当然夫婦生活にもそっくり投影されている。したがって「くれなる」は戦前の彼女の成長の到達点を示すと同時に、狂気の時代にすこしずつ侵食されていく、屈折の要的位置にあたり、初出問題⁽⁷⁾もふくめて、作品へのアプローチの仕方もさまざま考えられる。ここでは単行本化された作品世界に限定して、フェミニズムの観点からさらに具体的に迫ってみたい。

2

「くれなる」に先立つこと二ヶ月前、すなわち一九三五年十月の『婦人公論』に、佐多稲子は「怖しさ矛盾」というエッセイを発表している。いわゆる「くれなる」事件ともいえるべき夫婦生活の危機にいたるいきさつを書いたもので、作品成立の背景をつぶさにつたえているが、その中に「私は自分の仕事に不満を持ち、それへの劇しい欲望のため」といふ思ひ上った願ひを盾にして、二人の生活を

放棄する考へにしばしば囚へられ始めた」とあり、いかに激しい自己実現への意欲にとらわれていたかがわかる。また、〈家庭生活の煩雑さが婦人を縛るといふ外的なものだけでなしに、そこに婦人を遅らすものがある〉といい、〈芸術の仕事はもつと／＼現実の生活とからみ合つてゐて、書くといふことはそのまゝ生活との組み打でなされ〉なければならず、〈女である私は自分に対するこの闘ひを二重にしなければならぬ〉とある。つまり作家としての仕事と、家庭生活での煩雑な仕事やそこに置かれた妻の立場が矛盾することを語っていて、前述した「くれなる」における明子の言説にそのまゝかさなってくる。当時も女性読者からは多くの反響があったようだが、⁽⁹⁾「くれなる」は、女性における結婚生活と職業の両立の困難さという、今もって解決されない根本問題を梃子にしながら、前章でも触れたようにまさしく結婚制度のしくみ、もっといえば妻の席の仕かけをこじあけてみせているといえよう。

夫の席ならぬ妻の席が職業と両立しがたいのは、男性中心社会を支えてきた男は「外」、女は「内」という性役割分業からなる結婚制度下では、女が職業を持ったからといって「内」の仕事こと〈家庭役割⁽¹⁰⁾〉が消えてなくなるわけではなく、かえって二重労働を負う形になってしまふからである。しかもその根底には妻は夫の従属物という通念がぬぐいがたくあって、夫を中心に生活が展開するため、結果的に妻の生活上はおろか精神の上でも束縛し、妻の自由がきかなくなるからである。佐多稲子は「年譜の行間」⁽¹¹⁾の中で「くれなる」当時を回想しながら、〈一人で物を考えようと思つても、そばに亭主の生活がぐるぐる回つてゐるし、夫は勝手に自分の生活と

いうものが出来てもへこちは向うに合せて暮さなければならぬい、また〈男は助手をしてくれる奥さんがいる〉が女は逆だと、妻の立場について語つてさへいる。

これまで長く妻の役目とされてきた家庭役割、すなわち〈性差別の基本⁽¹²⁾〉ともいふべき家事労働や、それを一手に担う〈主婦役割⁽¹³⁾〉については、最近『主婦の誕生』⁽¹⁴⁾や『家事労働に賃金を』⁽¹⁵⁾等々が出版され、軽視されがちだったそれらの問題がようやく正面きつて論じられ出した。『主婦の誕生』によれば、主婦とは〈召使以外の人間で、家庭の任務のほとんどに（もしくは、これらの任務を果たす召使の管理に）責任を持つ人間〉とあり、その仕事の内容にいたつては、炊事洗濯、掃除はもちろんのこと、子供や夫の世話から栄養・健康・家計の管理にいたる家庭内の雑事、心づかいといったがふくまれる。「くれなる」の明子の場合には女中がおり、年取つた祖母には子供を任せるなど、家事の一端は引き受けてもらっているが、それだけに気づかいはふえるだろうし、なんといつても家政の責任は明子にある。祖母への気兼ねから女中への盆の贈物等々の気配り、また子供の世話にしても、痒い所へ手が届く心くばりは当然のように母親の仕事となり、おまけに子供の避暑地行きの準備万端同伴にいたるまでしかりである。夫は気づかぬふりですませても妻の場合にはそうはいかぬのである。

さらにもっとも気苦労なのが夫の世話だが、明子夫婦はプロレタリア運動とともに戦つた同志だから一般の夫婦よりは意識の上では対等に近いものの、なんといつても一九三〇年代のことではあるし、特に明子が夫の広介よりも先に作家になつていたから、〈その

ことは却つて明子の妻としての心づかひを大きくさせるばかりで、いつでも夫の生活を「真つ先に立」て、「家庭的な些事から」守ろうとしてきた。明子が夫のために食事の世話をしたり、仕事の助手をつとめたりすると夫は満足するが、そうした内助の功から、時には夫の母親役、好きな女の話まで聞いてやる姉さん女房までかつて出なければならぬ。まだある。夫の都合、機嫌次第で外出も見あわせねばならぬし、夫婦共通の来客があつても茶の接待役は妻の方で、夫は客たちと一緒に外出できても妻は取り残されなければならぬ。そのうえ夫の収入（文芸評論家として再出発したばかり）は彼の仕事の計画にまわるが、妻の明子の収入は家の経済を支える方ばかりまわされるといった、家事労働と作家業の完全な二重労働を負わされていることになる。にもかかわらず、仕事を持っていることで夫のメンツ・不自由をそこなわないように、妻は心をくだかなくてはならない。日ごろそれだけの我慢をかさねている明子だが、だからこそ夫の女性問題をきっかけに、ついに「仕事を」持つてゐた女房だからこそ、余計に、気をつかつて、旦那様にもしてゐたとおもふんだ。なんて馬鹿々々しい。そんな微妙なことは誰も知りやしない。あなただつて知りやしない」と、夫にむかつて爆発せざるをえないのである。

以上、明子の妻としての立場が抱える複雑な役割について縷縷あげたが、それにしても仕事を持つ女房だからこそ気をつかう、つまり負い目（現在なお女たちの意識からぬぐいえない癌）に感じるとは、何よりも明子自身が内なる性差意識から脱け出していない証拠なのだ。したがって実質的にも意識的にも明子は性役割的な支配を

まぬがれていないといえるが、そこで次に、彼女の内なる性差意識と、それとの葛藤について解説してみる。

3

ところで、主婦役割のなかでも夫を立て夫に合わせる妻の立場を、明子がわずらわしく思うようになった引き金は何であらうか。それは夫の二年間の獄中生活による留守のために味合つた、へひとりで暮らす自由さの体験にはかならない。一度手にした、自分の生活を自分で支配できるという自由な体験の記憶は、作家としての情熱や成長への意欲に結びつく時、夫が在宅しているが故にいつも要求される妻としての立場と、作家としての仕事の矛盾をはっきりと意識化させたに違いない。結婚制度の中での妻の席の仕かけが見え出し、女が解放されなければならないことに、観念ではなく現実の問題として目覚まされていくのである。したがって夫広介の確執が起ってくるのは必然だし、それにもまして内なる戦いが激しくなってくるのもまた当然だが、「くれなる」の特色は、まさにこの自己葛藤に視点を据えていることにあるだろう。

明子の内部で錯綜する意識の中でも、妻としての意識と作家としての意識の二重性が矛盾のメカニズムの根幹をなしているものだが、厄介なのは明子の中の古さであり、制度すなわち「外縛」としての「社会の歴史のおいめと習俗のきずな」⁽¹⁷⁾は、いまや彼女の意識に浸透して「内縛」⁽¹⁸⁾となつてのことである。その大きな要素が妻としての意識、つまりは女房意識にほかならず、彼女の自己実現へのはばたきを抑制する元兇となりはてているのだ。「くれなる」前

半をつらぬいているのは、ほとんどこの古い女房意識との葛藤と、へもつと、もつと、豊富な人生へ突入してゆかねばならないのではないか。そしてそれを、私は欲してゐる。飛躍する感情と、部厚な熱情を人生に、大衆の生活に、求めてゐる」といった自己変革への願望といつていい。

そして作品の時間は、明子が内なる女房意識に異和感を覚えるところから開始されているのだ。

今日岸子と二人きりの話の末に、ふと思ひ立つて、今またその国府津への汽車にのつてゐる。思ふと、明子はふと佗しい気持がしてくるのであつた。その頃の自分たち夫婦の生活と、この頃のそれが格別どう變つてゐるわけではない。そして、元の方がより楽しかつたわけでもなかつた。むしろ、その時は明子はいつにな子供連れに、広介と一緒にの氣持が妙にはづかし、中ぶらりんであつたのを思ひ出す。夫と子供と一緒にゐると、明子は知らず／＼別な自分が誰からともなく要求されてゐるようで照れるのであつた。広介に子供を抱かせたりするのが厭なのである。そしてそのためにはいつか自分が女房らしく振まつてゐる。すると今度は自分が妙にぎこちなくなる。かういふ氣持は、連れが広介だけであるか、子供だけか、どちらか片方の時には無いものであつた。両方が一緒だと、そのことが妙に意識されるのは何故なのであらう。

明子の自意識の強さ、すなわち自分を意識すること、自分をみつめる意識のたいへん強い人間であることがうかがわれるが、実はこうした自己解剖の意識（眼）がもっとも厄介なしろものであり、彼女

のやみくもに飛翔しようとする願いに水をさす原因の一つにもなる。この自意識の鏡に映すと、子供と夫に囲まれた円満そうな家族の図は、ゆつたりとした幸福な氣分を誘うよりも面映ゆさを覚えさせるばかりか、本来の自分ではない別な自分、すなわち女房としての自分を要求されているようで、いかにも女房らしくふるまい、演じることに照れくさささへ感じさせられてしまふのである。夫に子供を抱かせるのが嫌なのは、へいつでも家庭的な些事から広介を守らうとし、彼の俗世間には当てはまらぬやうな性質も、彼の詩なのだとおもひ、純粹に保たうとして努力してゐるからだ、このような配慮は逆に、自分の中の世話女房らしさ、いいかえれば否定していたはずの習俗、良妻賢母的側面が思わず引き出されてしまふ結果になる。夫や子供が両方一緒の方が性役割的な支配にまゐることはまり込んでしまふ女房らしさをいっそう促進させられるが、そうした自分を目覚めたもう一人の自分が意地悪く觀察するので、へ妙にぎこちなくなつてしまふのである。覺醒した意識、成長を願う氣持が、自分の中の古い女房意識に反撥するためである。

いま掲げたのは明子の内部の問題であつたが、外部との関係においても、へ些細な例でをかしいけど、広介が誰かと討論してゐる時には、私は黙つてお茶を汲んでゐるわね。黙つてお茶を汲まざるを得ないのよ。何だか亭主と一緒に言ふやうでおかしいのよ。一緒の時はどうしても、外から見れば女房は女だと言ふ氣があるでせうからね」と、たとえ友人間であつても他人の目を意識して、女房的立場を逃れることができない。その結果、へ自分の成長が、女房的なものにどうしても掣肘されさうなの」と、女房意識そのものの

が、結婚制度の性差のしくみにとり込まれた意識にほかならないことに気づきはじめるのだ。それはそのまま「何かに遠慮して小説を書くといふやうな仕事は充分出来るかしら」といった作家としての仕事への不安と意欲に結びつき、ついに「私は私の生活を持ちたくなつたの」という思い、つまり夫と別れることさえ考えるまでに至るのである。だが、内なる制度（性差意識）としての女房意識が、実は己れの内部の敵の正体であることを見すえながら、離婚によっていきよにその解体を図ろうとした到達点は、夫の女性問題によってあえなくつきくずされてしまうのである。明子の女房意識解体作業も、激しい解放への欲求もゆきなやみ状態に陥るが、以下その軌跡をたどってみよう。

4

自分の生活を持ちたくなっていた気持ちに拍車をかけたのは、明子が留置場生活から帰宅後の家の変化である。家はすっかり夫の生活によって占領され、家の中の重心が夫に移っていて、「作家としての明子の生活の根本が侵食されてゆくやうな不安」にかられたからであった。夫との抗争は激化し、同志愛的な夫婦の結合も、いまや「自分の成長を希ふ気持は相手との関りではなされ」なくなり、明子はいよいよ自分の生活が持ちたくなって、「いいわ、奥さんをお持ちなさい」と、夫をそそのかして別居の意志を暗暗裏にほめかすのである。

しかしいざ夫に女性問題が起きてしまうとそう簡単にはいかない。それをバネに、離婚後の家をへすつかり自分の空気で埋めつ

くすことを夢想し、「私はすでに誰かに愛されなければならぬ必要は無い」と自立を志し、「女の髪形の形といふものはそれがおしやれであるなしに拘らず、その人の人柄を敏感に現はしている」といつて髪までカットして自分のイメージの革新さえはかるが、自己変革は果せない。それどころか、「自分の力んだ考え方の中に残り残した問題」、すなわち夫への愛をよびさまされ、夫の恋愛が進行すればするほど夫への未練に動乱するのである。耐えがたい嫉妬心や、
「あゝ、こんな淋しさ、こんな淋しさ、知らなかつた。どうしたらいいかしら。一生懸命になつて暮して来たのは、一体なんだつたのだらう」といった孤独感が心を噛む。その果てに、

ある時期にふと思ひ上つたといふことで、自分は人生からこんな復讐を受けねばならぬだらうか。何のために自分は成長をなご希むのだらう、明子は自分の過去の全生涯が全く無価値なものに感じられた。これ以上生きてゆく力は失はれたやうに思はれた。自分の生き方の信条が根こそぎ否定された感じなのであつた。それを目前に突きつけてゐるのは、広介の愛情が他へ移つてゐることなのである。ちよつと思ひ上つたといふことで、こんなひどいし返しを受けるのかと、明子は承認し兼ねる怨恨で泣いた。しかし今はそれを自分で招いた、といふことが大きな悔で彼女を叩きのめしてゐた。

と、これまでの成長への意欲を逆転させるかのような心的状態に陥り、自己実現への欲求が夫の恋愛事件まで招いたという後悔に打ちのめされるのである。

この一節については中野重治が的確な批評をくだして、人

生・生活・文学にかけてきた明子自身の半生の信頼や、二人の貧しい男女が生活の一つにより合わせてやってきたすべての努力を、へ「ふと思ひ上つた」思いあがりという言葉で、その受けた「復讐」という言葉で一と思いに葬ってしまおうとする考え方が問題であり、へ小さければ小さいなりに、途中までならば途中までなりに、自分の人生をつましく秤皿にのせて、その目盛りを正確に読むということを行きなりに放り出してしまい、秤皿そのものでひっくり返すことで自分の乱れた心理にある解放感・平衡を与えようとする心理、この心理が、ある場合の人間に自然でもあり、それだから同情されるのでもあるが、しかもそれ自身としては、結局のところ人生にたいする最も傲慢な態度であり、人間そのものの否定であり、社会とその一粒という客観的な関係のなかで、一粒の主観を盾にこの関係そのものを否定することだということ、外ならぬこの意味でデカダンスだということを作者が明子に教えなかったことが問題だと語っている。明子の心の中までわけ入った解読であり、彼女の目覚めの質がこのあたりにうかがえることを知らせてくれる。その点については次章で問うとして、この、あたかも目覚めなければよかったとでもいいかげんなニュアンスの嘆きは、意外と明子の心の深いところをつかんでいて、ついに「町の女房の発作」のように自殺までこころみようとする。

がしかし、半狂乱のような状態になり、しかもへどうして仕事なんかしたのかしら。仕事なんてしなければよかったな」などと口走りながらも、意識は二重構造になっていて、根底の醒めた部分では、へ今更、自分は仕事を捨てることは出来ない。捨てたところで

安らかな二人の関係が新しく作れようとは思えない」と、愛ではなく確かに仕事を選択している。このあたりが職業作家に徹する昭和作家らしく、たとえば田村俊子など愛に自我の燃焼を求めた大正作家とは違うところである。したがって、へ諦めるといふ感情は、もともと事の起りに初めから定められていることを承知した上で、断ち切ることでできない愛の炎に身をゆだねているといっている。なんといっても十年の月日というものを、思想の同行者として二人が善くどちらをも伸ばすやうに暮して来た相愛の夫であり、その努力がかえってへ一定の段階へ来た時に、お互に桎梏になつていたことに慄然としているほどのだから。それにもまして、この愛を捨て、いま一步別れることへ踏み出せないのは、経済的理由などではなくて、何よりもへ独りでいて干からびるのは堪らない」という思いからである（自由な婚外恋愛がなかなか不可能な時代であったから）。夏の終りのさびれた避暑地で、明子が子供たちと過す雨の日の光景のようなわびしい離婚後の生活や、へ子供のためにガン張つてガン張つて暮し、それなのに、自分の仕事をも育てねばならぬ不安な将来しか浮かんで来ないからである。

にもかかわらず、夫の恋愛が成就しないで妻の明子のもとに帰って来た時、よろこんで迎えるよりもまるで振り出しにもどつたやうに、再び重荷を背負い直したように感じるのである。いっときは「同志討ちの痛ましき」で身を寄せ合ったりするが、すぐさま以前より激しくお互の傷をむしり合つて争い出す。なぜなら夫が外に仕事部屋を持つということで一つの打開策を見出しはしたものの、問題は解決したわけではなく、第一라운드의幕が降りただけにす

ぎないのだから。明子は飛翔できなかった分だけ自嘲的になるが、だからといって自分の仕事への欲望を捨てたわけではなく、問題がいよいよ深刻化したところで、小説の時間は終わっている。

明子の自己実現の理想は、愛も仕事ともに充実できる生活であったはずだが、その両立が難しくなった時、愛はあきらめ仕事を選択しようとした。だが結局は愛も捨てきれなくて七転八倒するのだが、考えてみると、この愛と仕事の矛盾に引き裂かれるところから小説ははじまり、その深刻化で終わっていることになる。とすれば、明子の言説はまさしく一筋に、作品世界をつらぬいているといえよう。

5

さて、それでは明子の目覚めの位相とはいかなるものか、その質について検討しておこう。

これまで「くれなゐ」論といえば宮本百合子や中野重治の論がもっとも本質を指摘したものと思ってきた。その思いは今も変わらなけれども、今回あらためて新鮮なインパクトを受け直したものに、徳永直の『くれなゐ』に就ての覚え書⁽¹⁹⁾がある。明子が結果的には金縛りにあっている女房意識にも関連することについて、次のように書いているのである。

夫のあとを追ふて階下へきて、さて向ひあつて四辺りを見廻し、埃だらけのその辺を、ああ、といふ臆怖な気持で嘆息ついても、広介へむかつて、「ちよつと掃除しやうじやないの、妾拭くからあんたは水を汲みなさいよ」とも云へない、いや云ふことを

潔よいとしない明子である。

恐らく二人の子供の親爺である広介は、世の常の労働者のやうに、雑巾掛したり、茶碗を洗つたり、あるときはおむつも洗つたりした経験はないに違ひない。さういふクラシックで非大衆的な生活振りは、しなかつた側と同時にさせなかつた側にも原因がある。さらにそれが広介明子夫婦なるものの作家といふものへ対する理解の特質ともなつてゐるのではなからうか？

(中略)

広介を糠味噌くさくさせまいとする明子の努力は、「くれなゐ」全篇を通じても判然と感じられるやうに、広介のそうした理論を明子が支持してゐるからである。このことは立派であり、明子自身もそう振舞つてゐる努力は並々ではないが、同時に家庭といふ已むを得ぬ形態が生みだす糠味噌の事情を己れ一人でこつそりと処理することによつて、糠味噌くさは揚棄されて居らず、広介は「旦那サマ」になり、広介の芸術家気質は、何となく家庭から遊離した書生っぽの感じを読者に与へる。

つまり徳永は、明子の〈家庭的な些事から広介を守らう〉としてきた〈立派な〉女房意識そのものに問題があること、〈糠味噌的な事情を己れ一人でこつそりと処理することによつて、糠味噌くさは揚棄されてゐないこと、へしなかつた側と同時にさせなかつた側にも原因があることなど、重要な指摘をしているのだ。結局明子は女房意識を解体しきっていないばかりか、むしろその中にはまり込んでしまっているのだが、もちろん明子はそうした自分に満足しているわけではない。糠味噌的なものをすべて背負っているだけ夫

に対する日頃の反発が鬱積して抗争にもなるのだが、へ突きつめてゆけば、それも結局は自分から女房的になつてゐることの裏返されたものであることゝに気づき、自分自身にへ充血してゆくやうに腹が立つゝといったように、己れの女房意識との葛藤は絶え間なく繰り返されてゐる。しかしそれは、徳永も指摘しているように、へ立派なゝ世話女房態度をつきくずして外側にむかい、相手にむかつて要求しないから、ひたすら内向して自己葛藤の連続に陥つてしまうのである。挙句の果てに、世話女房と作家稼業が両立できないから、自分は世話女房の場をおりて、夫に奥さんを持つてという責任回避の発想まで出て来てしまう（この発想に後で仇をとられ、自己矛盾を起こしてしまうのだが）。自分はおりが他の女性には夫の助手・世話女房をつとめさせるとは、男性に都合のよい結婚制度をそのまま認めていることにはかならない。自己変革ばかりでなく、もっと相手に家事労働の分担も要求し、権利を主張して、長期的展望をもつて夫の変革をもころざすべきだったろう。もっとも明子とてそのことを知らないわけでなく、だからこそ夫との抗争も絶え間なかったわけであるが。少なくとも頭の中だけは夫の広介もフェミニストだったろうし、互いに性役割支配下にある女房意識や亭主意識を解体したむこうに、新しい対の関係を結べなかったか、と思うのは今日の批評というものだろう。

それからもう一つ嫌味憎くささとの関連でいえば、明子は夫に嫌味憎くさを分担させずに自分がそれを一身に背負うほどしっかり者で、優等生的で、可愛いひばりちゃんならぬ姉さん女房も同然だが、このような態度は逆に夫を圧迫することにならなかったろう

か。またそれにもまして、いつまでもへ何となく家庭から遊離した書生ッぽゝさの抜けない夫になるように、妻自身も手をかしてしまつたのだともいえよう。夫のへ俗世間には当てはまらぬような性質も、彼の詩なのだとおもひ、純粋に保とうとして努力したゝからでもあるが、明子には文学というものを一般の生活から一段離れた高いものと見てゐる⁽²⁰⁾きらいがある。

それはこと文学にかぎったことではない。たとえばデパートへ子供の水着を買いに行き、子供のものを自分で見たてたいという母親らしい感情さえ現在の明子の成長意欲をはばむものに感じながら、いざ売り場に行くと、へ正札と色合いを選つてその山と積まれてゐる子供海水着を引ずり出し、かき廻して、鼻に汗をかいてゐる自分を発見し、今度はへはゝ男はかういふ下劣な興奮はしないだらう、さう思ひ、／＼やつぱり自分の、くだらぬもの、古いもの、弱いものに対する反撥なのだ——と思つてへ選る手をやめゝるところがある。覚醒した意識と自分の実体との葛藤内景だが、前者からみて、興奮して子供の水着を選ぶ自分自身の姿は、女のくだらなさ、古さとして映つてしまふのである。ここには成長への意欲の激しさのため性急な爪先立ち状態になつてゐる様子がうかがえるが、そもそも明子の覚醒した意識は、へ知（＝近代）の体現者としての男の価値観に傾斜してゐて、そうした男の眼によつて女の現実を裁断してゐるからである。

また、「くれなる」⁽²¹⁾初出段階時での、夫の恋愛相手に対するへ私より低い女」という表現にも象徴的にあらわれてゐるように、へ中味の何も無いくせに気ばかり強いお豊の性格」といった祖母へのま

なざしや、へ町の女房の発作のやうに、まるで馬鹿げた姿」とかへ自分が彼女の過去の生活感情から低い大衆の生活に溺れてしまふ要素のあるものも怖ろしいことだつた」というような記述など、庶民の女たちへの軽視や大衆蔑視が散見され、プロレタリア運動時代の鼻もちならない前衛意識、あるいは目覚めた女の驕りがうかがえるのである。

とみてくると、明子の女の解放への視座は、へ女の力の弱さや、女に辛い社会制度の欠陥を指摘し、へ男全体が癩にさわつてくるの」といった男性社会への抗議の側面まで届いていながら、それはけして男社会への異議にはなっておらず、むしろ男性並の人格・教養・能力の高みにこぎつけることであり、働く女性や知識人女性等々の目覚めた女たちを中心対象としていて、一般の庶民の女たちまで十分視線がのびていないきらいがある。それは明子自身が、彼女が低いと思っている町の女房から脱して自己変革しようとかあがいている最中であり、まだ目覚めたばかりで、爪先立っている段階だからであろう。だから前章でも触れたように、夫の女性問題で足を掬われ、へ何のために自分は成長をなど希むのだらう」といった、これまでの意欲を逆転させるような嘆きに陥ってしまうものもある。ともあれ明子の目覚めは、自分の体験を核に、へ私は書くわ。女の、いろいろな苦しみや、悲しみを書くわ。ねえ、それでなければ私は救はれないもの。どんなにたくさん女のいろいろなことで苦しんでいるのか知れないのね。私は書くわ」と、女全体の問題へとひろがりつつあるのは確かだ。

作者佐多稲子はおそらくそれを基点として、獄中に夫をとられて

いる妻や、夫の仕事に嫉妬するほど自分の仕事に意欲的な妻、あるいは夫の重石になっている妻たちを交錯させながら、明子夫婦の問題を追求し、女が解放にむかつてはばたく苦闘の姿を描き出したのだらう。「くれなゐ」というタイトルはまことにその内容にふさわしく、最近のフェミニズム批評の季節にもっと再評価されなくてはならない作品だらう。とくに夫婦関係における性差の問題に真正面から取りくみ、「フェミニズムの視座」⁽²⁹⁾で駒尺喜美がいうところの、家事労働の問題を作品化した小説路線に近いところまでこぎつけているといえよう。しかも性役割支配が生み出した内なる制度としての女房意識を見据えた点、伊藤野枝の「惑ひ」や宮本百合子の「伸子」に共通しており、三人の作家それぞれが、妻という立場は「自分」を失わせ、女の自由な成長をさまたげると記述しているのである。

この論考では明子に焦点をしばって追求して来たが、本当は夫の広介を問うところまで行かないと片手落ちになるだらう。縷縷述べて来た明子の内外の状況は、広介がつくり出しているものでもあるからだ。しかも、一九三〇年代にあつては、このカップルは新しい女と男の関係の、おそらく最前線を示すものであったに違いないからである。しかしすでに紙数もつきた。小説の語り手と明子の距離がなく、作者には明子の言説の記述が精いっぱい広介がよく見えていず、したがって広介の記述のあり方がいま一步不十分なきらいもあるが、そのこともふくめて、稿をあらためて論じたい。

注

- (1) 上巻(昭58・5)下巻(昭59・4) 中央公論社
- (2) 「女学雑誌」明24・1
- (3) 「中央公論」大4・7
- (4) 「新日本」大7・10
- (5) 「改造」大13・9、15・9、分載10回
- (6) 「窪川稲子論」「新潮」S15・6。百合子は〈男性への抗議の書〉についてさらに、〈素朴に男性への抗議の書となりきれない程度にまで、作者の心情は社会の歴史と個々の男女生活との関係に目ざめてゐる、と書いてゐる。〉
- (7) 北川秋雄が「佐多稲子『くれない』論のためのノート」(「独立文学」昭61・9)で、初出「くれない」「晩夏」と単行本「くれない」の本文の異同について論及している。「晩夏」として独立してみた方が屈折の足どりが理解できる。
- (8) 「くれない」初版、昭13・9、中央公論社
- (9)(11) 佐多稲子が『年譜の行間』(昭61・6、中央公論社文庫)で触れている。
- (10)(13)(14) アン・オークレー著『主婦の誕生』'86・5、三省堂
- (12) 駒尺喜美「フェミニズムの視座」(インタビュ)「日本文学」昭62・1
- (15) マリアローザ・ダラ・コスタ、'86・10、インパクト出版会
- (16)(18) 青木やよひ『女性・その性の神話』昭57・4、オリジン出版センター
- (17) 宮本百合子『婦人と文学』昭22・10、実業之日本社

- (19) 「文学者」昭14・4
- (20) 学業も途中で終えなければならなかった佐多稲子には、時としてインテリコンプレックスかと思われるほど、文学青年へのかぎりない憧憬が感じられる。
- (21) 大塚博が「佐多稲子『くれない』論」(「昭和文学研究」昭60・7)で指摘。
- (22) 注(12)に同じ。この中で駒尺喜美は〈例えば文学で言うなら、家事労働の面を、宮本百合子でもどうして書かないのか。それがまさに男の目なんです。(中略)夫たちは酒をくらったり、友達を連れてきたりして、文学がどうだ、ハチの頭だと言って、女は炊事場で、なけなしの財布をはたいて、いかにごちそうをつくるかとか、そういうことにかまけていて、自分は話の中に入れない、ときどきちょっと座ってお愛想笑いをして何とか。それで、こっちは子供を寝かしつけたり、子供が泣いたとどなられて、外へ連れて行けとか言われて、自分はどんな思いで寒空の下で歩いていたかということをや々と書いたら、これはすばらしい小説になるんだけど、残念ながら誰も書かないんですね〉と語っている。